

“うたごえは平和の力”

若園達雄 (T1)

「核兵器のない世界を！長崎から」をテーマに、2010年日本のうたごえ祭典 in 長崎が10月15日から17日まで開かれ、男声合唱団「昴」、混声「とよの合唱団」の一員として参加、出演しました。

同祭典は、歌を通じて平和を発信することなどを目的に1953年に始まり、毎年全国各地で開催され、ことしは被爆65周年の節目であることから、長崎市内他5カ所を会場として全国から4千人以上が参加して、歓迎の挨拶に立った田上長崎市長と共に仲間たちと交流を深めて来ました。

ことし、広島・長崎は被爆65周年の記念日を迎えました。そして昨年オバマ米大統領が「核兵器のない世界」を掲げて5月にはニューヨークで核不拡散条約 (NPT)再検討会議が開催されるなど、核廃絶への機運が世界的に高まるなか、潘基文氏が国連事務総長として初めて広島平和記念式典に参列し、また長崎を訪問されました。

8月6日の広島平和宣言で秋葉広島市長が「地獄の苦悩を乗り越え、平和を愛する諸国民に期待しつつ被爆者が発してきたメッセージは、平和憲法の礎であり、世界の行く手を照らしています」と、核廃絶への決意を語り、8月9日の長崎平和宣言で田上長崎市長は、まず核廃絶へ「一瞬もあきらめることなく歩み続ける被爆者の姿に私は人間の希望を感じます」と述べ、そして「NPT再検討会議において『期限を定めた核軍縮』の具体的な道筋が議長から示されたにもかかわらず、核保有国が現れて、世界は逆に核拡散の危機に直面している」と警告し、その上で潘国連事務総長が提唱する「核兵器禁止条約」を「私たち被爆地も強く支持します」と表明されました。



潘事務総長は「被爆75周年に核兵器の終焉^{しゅうえん}を祝おう」と述べましたが、しかし、肝心の日本政府の取り組みの仕方は「悲惨さ」を口にはしていますが、実際の軍縮外交においては「究極的な廃絶」にしたいとだけの姿勢の現実があります。政府のもっと真剣な取り組みが問われなければならないと思います。

被爆地長崎を訪れ、「原爆資料館」をはじめ被災遺跡の数々をめぐり、原子爆弾という人類史上最も愚かな殺りく兵器が、一瞬のうちに長崎の町を廃墟と化し、7万余の市民が犠牲となった歴史と現実を学び、平和の尊さと平和憲法を守り抜かねばならないと、決意を新たにしました。